国際交流活動実施報告書

「Memory-Walking, Gathering, Connecting」
EWS in Berlin

期間:2026年6月15日(月)　～　2026年6月29日(月)

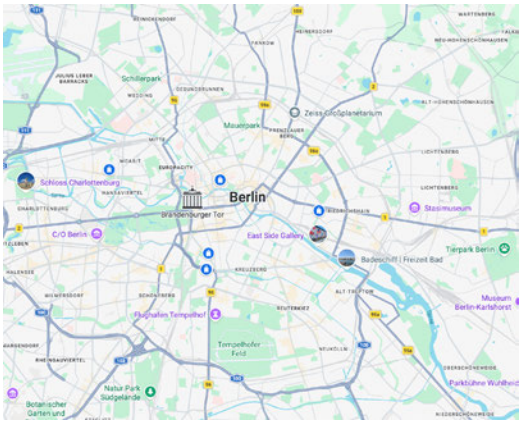
エクスペリメンタル・ワークショップ教員:

塩田千春 特任教授
EWS主任 ムーニー・スザンヌ 准教授
和賀碧 大学院美術研究科助手

ドイツでのサポーター:

塩田千春アトリエ
Tereza de Arruda(キュレーター)
武田竜真 (アーティスト)
Clemens Krauss (アーティスト)
Konstantin Laschkow (アーティスト)

場所:ベルリン(ドイツ)



参加者:

修士2年	日本画専攻	1名
	油画専攻	1名
	彫刻専攻	1名
修士1年	油画専攻	1名
	版画専攻	2名
	情報デザイン専攻	2名
	建築・環境デザイン専攻	1名

合計　9名

国際交流活動実施報告書

ベルリンは、かつて「壁」によって分断された歴史を刻みながらも、現在は多様なルーツを持つ移民や難民が共生する都市へと変貌を遂げている。異なる言語や記憶が交錯するなかで形成されたこの街において、記憶とは極めて個人的なものであると同時に、その断片には時代や社会の変遷が色濃く反映されている。

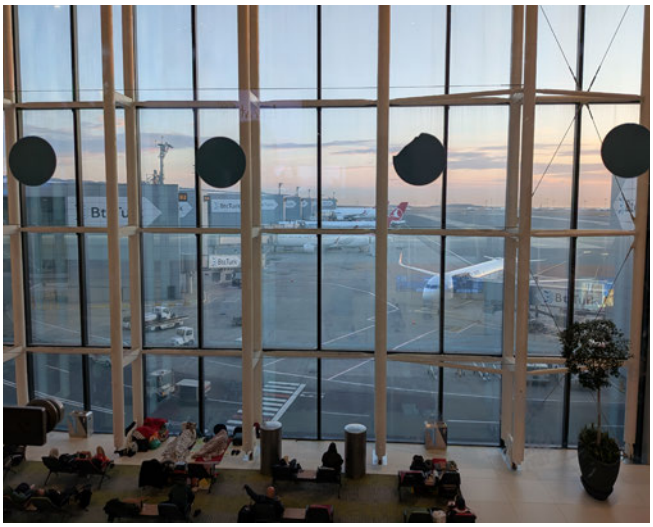
本ワークショップでは、ベルリンの都市空間を歩きながら、蚤の市で誰かが手放したものに触れ、街に溢れる言葉を拾い、異文化の断片を集めることを試みる。そして、収集したものを自身の経験と照らし合わせ、一つのイメージへと昇華させていく試みである。

不安定な世界情勢が続くなか、人々の間に生じる心理的な断絶はかつての「壁」のように広がりつつある。創作活動を通じて他者の痕跡や思考に触れ、自分自身の経験と接続することは、現代社会における見えない「壁」にするための重要な足掛かりとなるだろう。

日程・対象活動

6/15 日本出国









国際交流活動実施報告書





6/16

午前　ベルリン到着

午後　Hamburger Bahnhof を見学

ハンブルガー・バーンホフ（Hamburger Bahnhof）は、ベルリンにある現代美術館である。かつてはベルリンとハンブルクを結ぶ鉄道の駅舎として使用されていた建物を改装したもので、現在はベルリン国立美術館群の一部として、現代アートの重要な拠点となっている。広大な展示空間では、絵画、彫刻、インスタレーションなど多様な作品が展示されており、ベルリンのアートシーンにおいて中心的な役割を担っている。

6/17

午前　スタジオ・オリエンテーション

午後からは塩田千春先生との個別ミーティングの時間が設けられた。各自のポートフォリオや持参した作品を提示しながら、これまでの制作における思考や意図について対話を行い、それぞれの学生に応じた参考資料や素材、アプローチ方法などを共有した。





国際交流活動実施報告書





6/18

午前　武田竜真氏　特別講義（多摩美卒業生）

ベルリンでアーティスト活動をする武田竜真氏のスタジオを訪問し、特別講義を行なっていただいた。講義では、ベルリンでのアーティスト活動についても触れながら、大学在学時の初期作品から現在に至るまでの作品展開について詳細に共有していただき、大学卒業後にアーティストとしてのキャリアをどのように築いてこられたか、その歩みについてもお話を伺った。





午後

Tempelhof Airport

武田竜真さんの案内により、現在は公園として市民に開放されている「ベルリン・テンペルホーフ空港跡地」を見学。第二次世界大戦下に、ヒトラーの命令によってナチス政権下に建設された空港で、ナチスの建築家によって設計された。その後、冷戦時代には西側諸国が西ベルリンへ物資を運ぶための中心として利用された歴史があり、2008年に空港は閉鎖された。その後2014年に住民投票が行われ、滑走路や建築物を残し、市民が自由に利用できる公共空間として現在は利用されている。負の歴史を纏う施設を取り壊すのではなく、歴史を継承しながら既存の空間を生かして公共空間へ再生することの重要性を学んだ。

国際交流活動実施報告書

KINDL - Center of Contemporary Art

KINDLは、かつてのビール醸造所を改装し2016年に開館した美術館である。産業建築を活かした展示空間が特徴で、3つの企画展が開催されていた。これらの展示は、現代社会や環境、人間と他者との関係性をテーマとした作品が紹介されていた。

実際に訪れて印象に残ったものは、旧醸造所ならではの建築空間である。特に高さ約20メートルのKesselhaus（ボイラー室）は、6月に展示が行われていなかったため大きく開かれた空間そのものを体験することができた。美術館として改修されているが、産業施設としての記憶が残されており、建築そのものが作品のような存在感を放っていたことが印象的であった。

6/19

午前

Sammlung Hoffmann Collection

エリカ、ロルフ・ホフマン夫妻が40年以上にわたり、収集した国際的現代アート個人コレクションで、絵画、彫刻、写真、ビデオアートなど約1200点の作品を保有。

通常の美術館とは異なり生活空間の中で作品が展示されており、異なる世代やメディアの作品同士が常に新しい対話を生み出すような展示がキュレーションがされていた。

当日は、コレクションに精通したガイドによる特別なプライベートツアーが行われ、学生たちは作品や展示について質問しながら、活発に意見を交わすことができた。また、コレクションの所有者本人と面会し、作品収集の経緯やコレクションに対する考え方について直接質問する貴重な機会にも恵まれた。

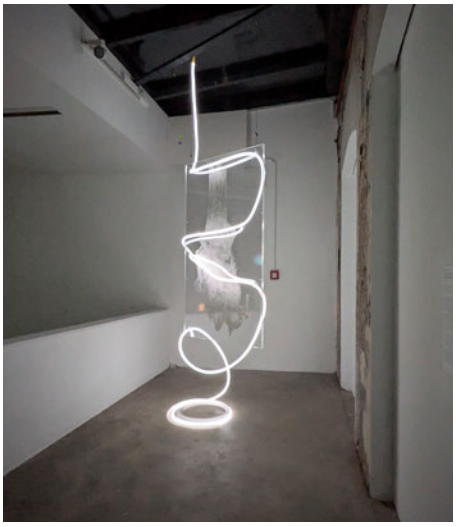
KW Institute for Contemporary Art

キエフ・ビエンナーレの企画「A Bird That Cannot Land」は、ウクライナの現状を背景に、Middle-East-Europeという概念と、紛争や植民地主義、強制的な移住の歴史に焦点をあてた国際的な巡回プロジェクト。展示作品は、戦争による記憶の断絶や土地の変容などを多様な表現で多角的に浮き彫りにしていた。





国際交流活動実施報告書





6/20

午前

Stasi Prison Hohenschön hausen

かつて東ドイツに存在した政治犯収容施設であるシュタージ刑務所を見学。

当時、国家保安省(シュタージ)は、東ドイツ市民への徹底した監視を行い、体制に批判的な人物や、西ドイツへの亡命を図った人々を取り締まっては収容施設に投獄し拷問を加えていた実態を知る。ここでは睡眠妨害や脅迫、長期間にわたる生活必需品の剥奪など、人間の尊厳を奪う心理的拷問が繰り返し行われていたことを学んだ。

第二次世界大戦時におけるホロコーストの惨劇を経たのちのドイツで、戦後再びこのような惨禍が起きていたという歴史的事実には、深く考えさせられるものがあった。

今回の見学で最も重要な気づきの一つは、こうした残虐な行為が、特別な「怪物」ではなく、ごく普通の日常を生きていた人々によって実行されていたという事実である。なぜ人は、同じ社会に暮らす市民に対して、これほどまでに残酷になり得るのか。学生たちは、このような状況がどのように形成されていくのかについて深く考えた。その過程には、他者を自分たちと同じ人間として見なさなくなる「非人間化(dehumanisation)」が大きく関わっている。さらに、この問題を過去の歴史に限定せず、今日の世界各地で起きている分断や差別、暴力とも関連づけながら議論を行った。





国際交流活動実施報告書





午後
スタジオワーク

6/21

午前中
Mauerpark flohmarkt
Mauerpark(マウアーパーク)で毎週日曜日に開催されるベルリン最大規模の蚤の市。かつて、ベルリンの壁で東西の境界線であった場所であり、現在では多くの人々が集う公空間となっている。市場には古着やアンティーク、古い写真やパスポート、雑貨、レコードなど、多種多様な品物が並んでおり、地元の人だけでなく観光客も多く訪れていた。学生たちは制作の着想につながる素材やオブジェを探し求めた。

Bernauer Str/Berlin Wall跡地
Bernauer Strにあるベルリンの壁の跡地やKapelle der Versohnung(和解の礼拝堂)を見学。現地では東西分断の歴史や、市民の生活に与えた影響について理解を深めることができた。





国際交流活動実施報告書

6/23

午前

New National Gallerie

「ブランクーシ」展や「ゲルハルト・リヒター」展、古典近代美術コレクションから厳選された「RUIN and RUSH」展、中谷芙二子の霧のインスタレーションを鑑賞。

中谷芙二子の作品は、霧や風や光、時間の変化によって刻々と表情を変え、建築空間と鑑賞者の身体が一体となる空間を体験。

また、ブランクーシ展では「接吻、「眠れるミューズ」「空間の鳥」などをはじめとする作品や作家のスタジオも再現されており、台座や彫刻、そしてスタジオが1つの空間として構成されていた。









Denkmal für die ermordeten Juden Europas

ヨーロッパのユダヤ人犠牲者記念碑を訪れ、巨大なコンクリートブロックが立ち並ぶ空間を実際に歩いて体感した。墓石が整然と並ぶ光景のようにも見えるが、一歩足を踏み入れると、地面が波打つように傾斜している。

奥へ進むにつれて、人間の背丈を遥かに超える石柱に囲まれ、まるで時間の止まった建築物の中に佇んでいるかのような感覚に陥る。一見すると規則正しく並列しているように見えるブロックは、それぞれがわずかに傾いており、そこにある種の個性（インディビジュアリティ）が存在していることに気づかされた。

国際交流活動実施報告書





6/23

The Empty Library

ベベル広場にて、イスラエル人のアーティストミカ・ウルマンによって制作された「The Empty Library」を見学。The Empty Libraryは、1933年5月10日にナチス政権の支援を受けた学生等によって、ユダヤ系作家や反ナチスの思想に反するとされた約2万冊の書籍が焼却された焚書事件の記憶を継承する作品である。

地下空間に造られた約2万冊の書籍を収容できる空の書架を、地上にあるガラス窓から覗く構造が特徴となっている。さらに、広場にはドイツの詩人ハインリヒ・ハイネの「本を焼くところでは、やがて人も焼かれることになる」という言葉が刻まれており、焚書が大量虐殺へとつながる危険性を強く示唆している。現地で記念碑を見学し、都市のパブリックスペースにおける作品の重要性や歴史の風化を防ぐ表現アプローチについて学んだ。







午後

スタジオワーク

国際交流活動実施報告書

6/24

Gutshaus Mürow

キュレーターのTereza de Arruda氏の案内のもと、ブランデンブルグ州にある「Gutshaus Mürow」を訪問した。17世紀後半に建設されたこのマナーハウスは、現在はアーティストのClemens Krauss氏とKonstantin Laschkow氏によって改築・運営され、アートインレジデンスとして活用されている。

周囲には広大な森が広がり、豊かな自然環境のなかで、創作活動に深く集中できる点が大きな特色である。

歴史的な建築と自然が共存するこの場所では、滞在するアーティストが地域の歴史や自然からインスピレーションを受けながら、制作や研究に取り組むことができる。また、夏季にはTereza de Arruda氏によるレジデンス・プログラムも開催され、アーティスト同士や地域住民との交流を生む場となっている。









6/25

午前

Topographie des Terrors(テロのトポグラフィー)

この施設は、ナチス政権期にゲシュタポや親衛隊の本部が置かれていた跡地に建設された歴史資料館である。写真、公文書、証言といった豊富な資料を通じて、ナチス政権が権力を掌握するプロセスや、それに伴う弾圧、迫害、ホロコーストの実態が克明に伝えられている。

国際交流活動実施報告書

資料館では加害の歴史を隠すことなく公開し、歴史的事実に向き合う姿勢が示されていることを実感した。訪問当日は多くの学生や教師で賑わっており、国家権力が一般市民とともに特定の人々を組織的に迫害し、人権侵害を推し進めた過程を検証する「学びの場」として、この場所が機能している様子が窺えた。
またドイツの教育課程ではナチス政権下で人々がどのように大量虐殺に至る道を進んでしまったのかについて、12歳から4年間を費やして学ぶ仕組みになっていることを知った。
見学後にはカフェへ移動し、学生たちとディスカッションを行った。負の歴史を学ぶドイツの姿勢と比較する形で、日本においては戦時中の「被害者」の側面を取り上げて学ぶ機会が多い一方、「加害者」としての歴史は隠される傾向にある現状について、意見を交わした。





Gropius Bau
建築家マルティン・グロピウスとハイノ・シュミーデンが設計した歴史的建造物を活用した現代美術館。館内では、国内外のアーティストによる企画展を中心に展示が行われている。今回は、塩田千春氏の学生時代の恩師にあたる「Marina Abramovic」の展示を鑑賞した。
そのほか、同館では「Peter Hujar/Liz Deschenes」や「Gabriele Stotzer」の企画展も開催されており、写真というメディアの可能性や、クィア、フェミニズム、政治的抵抗といったテーマを多角的に問い直すプログラムが展開されていた。個々の作家を紹介するだけでなく、現代社会と接続する視点から展覧会を構成している点が印象的であった。

午後　スタジオワーク

6/26

午前
BBK　ベルリン市が運営しているアーティストのための共同スタジオ(彫刻)を見学後、スタジオワーク。




国際交流活動実施報告書

20:00

Philharmonie Berlin　ベルリンフィルハーモニーのコンサートを鑑賞。





6/27

プレゼンテーション

最終日の成果発表では、学生一人ひとりがベルリンでの滞在経験やリサーチをもとにプレゼンテーションを行った。美術館やギャラリー、蚤の市、歴史的な場所を見学して得た経験に加え、ゲスト・レクチャーや塩田先生との個別面談、日々街を歩きながら行った観察や考察を踏まえ、それぞれが作品制作に取り組んだ。

発表では、これまでの制作アプローチから一歩踏み出した実験的な試みや、ベルリン滞在中の体験を制作へと反映させた作品が共有された。学生たちは現地での経験やリサーチを自身の制作と結び付け、新たな視点や手法を取り入れた表現を試みる機会となり、滞在を通して得た気づきを今後の制作へと展開する契機となった。



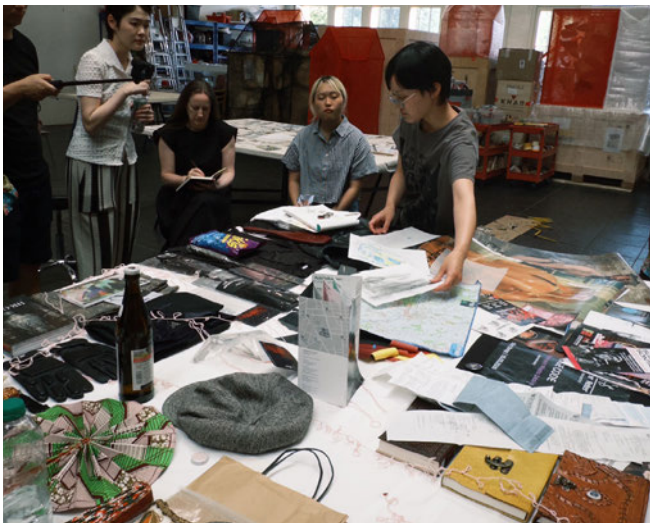


国際交流活動実施報告書













国際交流活動実施報告書





6/28

帰国



ワークショップのリフレクション

本ワークショップでは、ベルリンの街を歩き、そこに刻まれた分断や戦争、抑圧、移民、再生の歴史に触れることで、学生たちは自分たちが世界の歴史について知っていることはごく一部にすぎないと気づかされた。日常を離れた環境に身を置くことで、重く複雑な問題にも向き合いやすくなり、それぞれの意見や不安、そして未来への希望を率直に共有することができた。

また、海外で実際にキャリアを築いているアーティストやキュレーターなどの美術関係者と出会い、彼らの経験を直接聞くことは、大学卒業後の進路や海外で活動する可能性を具体的に考える契機となった。ベルリンで目にした大胆なキュレーションや空間の使い方は、普段目にする美術館展示が時に慣習的で保守的な枠組みにとどまっていることにも気づかせ、作品の組み合わせや空間との関係、鑑賞者への提示方法には、はるかに多様なアプローチと可能性があることを示した。

若いアーティストやデザイナーが世界と意味のある形で関わるためには、目の前の状況を当然のものとして受け入れず、「なぜ世界は現在このような姿になっているのか」と問い、その背景を理解しようとする姿勢が欠かせない。知識は力であり、こうした経験と学びは、学生たちが社会を深く見つめ、自らの作品を通して世界と意味のある形で関わっていくための確かな力となるだろう。